信州の生活科・総合的な学習の時間 実践誌

# ふるさとの大地

令和８年１月

29

信濃教育会

# ふるさとの大地 29

子どもの風景
おかむら　みつは（長野市立三輪小学校一年）／峯村真崇（千曲市立屋代小学校三年）／
下園優花（伊那市立伊那小学校三年）／うしこし　まち・もろずみ　ひなた（松本市立清水小学校一年）

表紙題字：市澤静山（信州大学名誉教授）　表紙写真：伊那市立高遠小学校　裏表紙写真：長野市立信州新町小学校


わたしたちを支え続ける『ふるさとの大地』
生活科教育研究委員会副委員長　藤澤直子……1

**特集**
子どもたちの「声」を聴いて考える……2

**実践事例**

**東信**
・さんぽにでかけよう　～さんぽで出会ったカナヘビとのくらし～
上田市立長小学校　一本鎗千夏……14
・さんぽの春夏秋冬すごろく　～長小の子どもたちの一年～……20
・泉小学校　3年1組通信　笑顔の日々
お団子作りを振り返る『ふるさとの大地』特別号！
佐久市立泉小学校　矢嶋泰介……22
・いきものベストショット　Part2
―わたしたち　こんな　なかまと　くらしています!!―
『ふるさとの大地』東信ブロック委員会……24

**南信**
・烏骨鶏ってすごいでしょ　～森組羽屋を伊那小フェスで開こう～
伊那市立伊那小学校　小林正樹……26
・興味をもつとき　それが学びの始まり
それは園児も小学生も。高校生だって、みんな繋がる学びの姿
『ふるさとの大地』南信ブロック委員会……32
・受け継がれるバトン　創作神楽〝尹良親王神楽〟
～先輩から役を託された私の演じる〝尹良親王〟～
阿智村立浪合小学校　石坂凜人……34
・やっちゃえブライダル　～Our Style Wedding～
長野県赤穂高等学校……36
・高遠高校　能登応援プロジェクト「のとプロ」
長野県高遠高等学校……38

**中信**
・山辺への愛　山辺藍展　～探究的な学びの方向～
佐久市立臼田小学校　村山茂樹……40
・のっぴきならない材との出会い
松本市立大野川小中学校長　馬場英晃……48
・ぼくの　わたしの　とくべつ……50
「〝わたしのアサガオ〟になっていく　はじめの一歩」
松本市立今井小学校　中島雅也
「たなばたまつり」
白馬村立白馬北小学校　玉水奈月
「ぼくのやご、わたしのやご」
松本市立清水小学校　馬場美穂

**北信**
・3校　それぞれの米作り
このでっかい田んぼを12人で？
長野市立戸隠小学校　折橋佑樹……52
「猫の額の」米作り
長野市立浅川小学校　山川満久……54
「今年の」米作り
飯山市立木島小学校　田畑隆太郎……56
・3校の先生が米作りをふり返って……58
・「4・1自然アート展」を開こう
長野市立通明小学校　中村円香……60
・〝わかほ〟で学び響き合う学級総合
長野市立若穂中学校　小林愛……62

# つっちー

一年　おかむら　みつは

はれたひ
じゃりじゃり
つっちーを　ほったよ
はれていて
ちょっとあつかったよ
でもとっても
たのしかったよ

※つっちー…校庭の土山の愛称

# わたしたちを支え続ける『ふるさとの大地』

平成八年に創刊された　実践誌『ふるさとの大地』（のちに信州の生活科・総合的な学習の時間　実践誌『ふるさとの大地』）は、平成四年度から全面実施された生活科の実践がより充実すること、また実践する先生方の学び合う場になることを願って、私たちの大先輩が生み出してくださいました。当時の生活科資料作成委員長　勝野伯一先生は、創刊号の巻頭言で「生活科は、教師の実感を抜きに語れない教科だと言われます。この実践集をお読みいただいた先生方が、ご自分の実践から得た実感と重ね合わせながら、先にあげた生活科の諸課題を解決する糸口を見いだされんことを願ってやみません」（一部抜粋）と述べられています。

「読者」としてかかわった『ふるさとの大地』。動物飼育の実践には、つい涙してしまっていました。特に別れのシーンは、これまでの子どもたちのエピソードが想起され、自分もその場にいるような気持ちで読んでいました。来年度ぜひやってみようと思う実践に出会えたり、子どもの見方の深さにため息をついたり、悩みが語られていると「自分だけじゃないのか」と勇気をいただいたりして、明日へのエネルギーをいただいたと感じています。

「執筆者」としてかかわった『ふるさとの大地』。学年で取り組む内容が決まっていた状況を、子どもたちが「やらなくてはいけない」と感じないようにできないだろうかと取り組んだ実践を書かせていただきました。実践中にはなかなかできにくい振り返りの機会をいただいたと思っています。さらに、編集委員の方が原稿を読みながら子どもの言動を位置付けてくださったり、その背景を探ってくださったりしたおかげで、子どもの新たな一面を見いだせたと感じています。

「編集委員」としてかかわった『ふるさとの大地』。今年度の特集はどんなテーマにしていこうか、県下の先生方はどんな内容を望んでいるのかを話し合っていくことからスタートしていきました。各ブロックから多岐にわたる実践の原稿が集まり、熱量に驚かされました。原稿を読んでいると、いつの間にか子どもや先生の姿を語っていることがあり、自分にとっては自分磨きの場であり仲間づくりの場でもありました。およそ三十年の間、様々な人がこの『ふるさとの大地』を通して実践へのヒントをもらい、自分なりの『ふるさとの大地』をつくり上げてきたのではないかと思います。

さて、二十九号の特集のテーマは「子どもたちの『声』を聴いて考える」です。実際に四つの学校を訪問し、今を生きる子どもたちと対話をしてきました。その中で感じたことは、子どもの「声」を聴くことのできる自分でいたいということです。この二十九号を読み終わった後に、目の前の子どもたちの「声」を聴きたくなっていただいたなら幸いです。

最後になりましたが、玉稿をお寄せいただいた皆様、特集にご協力賜りました皆様、本実践誌が発刊できるまでに携わられたすべての皆様に心より御礼申し上げます。

（生活科教育研究委員会副委員長　藤澤直子）